

「図解 経皮的胆管ドレナージ」

高 田 忠 敬 東京女子医科大学講師

杏林大学教授

相 馬 智

まさに時宜をえた著書である。閉塞性黄疸や胆道感染症で四苦八苦したのはついこの間のことである。PTCD の出現により、開腹せずに減黄処置が可能となり、一期的に根治手術ができるようになったことは隔世の感がある。PTCD さままであり、本法は外科医にとっても内科医にとっても、ましてや患者にとっては救世主とすらいえる。

著者の高田講師はこの道のパイオニアである。先人の苦労したものを誰でもが、何時でも、何処にいてもできるようにルーチン化した功績は大きい。本人の努力はいうまでもないが、消化器病センターという格好の場と、羽生教授という素晴らしい師を得てこそ、これが完成されたのだと思う。

この本は8章から成る。まず歴史的背景の中で、著者が本法に興味をもちそして学び、完成した経緯が淡々と述べられ、簡にして要をえて驕りがない。第2章で基礎的事項が、原理から呼吸による胆管の動き、留置チューブの組織学的反応から器具の開発の苦労が述べられている。第3章では PTC の実際が、第4章では PTCD の実際が豊富な写真と楽しい分り易いイラストで余すところなく述べられている。ここではこうすると危い、こうした方がよいと親切に解説され、あたかも高田博士の側にいて説明を受けているような錯覚におちいる。彼の喋り方や仕草が伝わる程 vivid である。第5章では重症胆管炎の PTCD の実際が述べられ、その管理面の記載は心憎い。

第6章の PTCD の内瘻化は、さりげなく症例を呈示して2通りのやり方がのべられているが、最初の症例の苦労は察するに余りある。第7章では外科的黄疸に対する本法の効果が述べられているが、従来の外科的減黄術より良好なこと、胆道感染や切除不能例に対する効果などは著者のもっとも誇りうる成績であろう。第8章では PTCD 効果に及ぼす諸因子を要領よく表示して述べており臨床家にとってすぐにでも役立つ貴重な指標である。

著者が1972年4月に最初の PTCD 減黄の臍頭十二指腸切除に成功以来302例の豊富な自験例の経験を余すことなく盛り込んだ力作である。

これから本法を初めようとする人にとっては格好の入門書であり、後半の章は、日常臨床で困難な症例や疑問を生じた時に緋く参考書でもある。表紙のイラストからして楽しい handy な本で、値段が安いのも嬉しい。

B5 頁148 図73 写真85 1978
¥4,500 円 200 <医学書院刊>